

佳作 雀と奴風

中野 靜

(一)

廣い原つばです。お空は青く晴れて、風が上つてゐます。朝日風に、字風に、さんび風、寒い北風に吹かれながらも、これもくゝ元氣よく舞ひ上つてゐます。其の中に和夫ちゃんはお姉さんを連れて、原つばまで風あげにまゐりました。お年玉に頂いた奴風が、中々上らないので困つてゐます。側で遊んでゐらした、小學校の帽子をかむつた、知らないお兄さんが、

「坊や、揚らないのかい？ 兄ちゃんが揚げて上げよう。兄ちゃんは風揚げが上手なんだよ」
「其中、何時しか、風を揚げて居た子供達も一人歸り、二人歸りして少くなりました。」
「和夫ちゃん、もう歸りませうよ」

「寒くなつたわ、もう夕方よ」
「お姉さんが、しきりに和夫ちゃんを、せき立ててゐます。和夫ちゃんも、段々くたびれてまゐりましたので、止めようと思つて、一ぱいに伸ばしてゐた紐を、たぐり寄せました。ぐんぐん下りて來た奴風が、ふき、そばの電信線にひつかゝりました。」

「困つたな！ お姉ちゃんも助けて！」
二人で其の下まで行つて紐をひつばつて見ましたが、風に吹きまくられて益々紐が絡んでしま

ひます。

薄暗い原つばには、もう凧あげしてゐる子供は一人もありません。和夫ちゃんは下から石をぶつつけて見ましたが、取れる筈はありません。棒切れを拾つて來ましたが、ミダキません。

「和夫ちゃん。危いわよ。電線に掛つた凧を取つてるミ電氣が通じて死ぬんですつて、危いから、もう歸りませう」

ミお姉さんは和夫ちゃんの手を取つて、お家の方へひつばつて行きます。和夫ちゃんは見えなくなるまで電線にかゝつた奴凧を振り返りくして歸つて行きました。

二二

もう三つぶりが日は暮れました。

雀のチー子ミ、チュウ吉兄さんは、お家へ急ぎました。

「今日はミても面白かつたわね」

「うん、御馳走もうんミ食べられたしね」

「くたびれたから、ちよつミここで休んで行きませうよ」
チー子ちゃん雀は、電信柱の横木に止つて、羽を休めました。チュウ吉兄さんも並んで止りました。

「あらつ！ 何だかあそこにふわ／＼動いてるわ」

チー子ちゃん兄さんのそばに抱きついて來ました。

「お兄ちゃん、恐いよ」

「大丈夫だよ、兄ちゃん見て來る」

チュウ吉さんが、近くにミんで行きますミ、凧です。風に吹かれて、ふわ／＼動いてゐるのです。さつき和夫ちゃんに、おいてきぼりにされた奴凧です。

「チー子ちゃん奴凧だよ。お家へお土産にしよう」

「厭つて こわくないの?」

チー子ちゃんもお兄さんの所へ飛んで行つて、二羽のくちばしでひつばつて、絡んでゐる紐を上手にほぐしました。

「よかつたわね。お父ちやまも、お母ちやまも、びつくりなさるでせうね」

「うん。さあ、早く歸らう」

二羽の雀は、大喜びで奴胤の兩のお袖をくわへて、元氣よく、羽ばたきして、飛んで歸りました。森のお家へ著いた時は、何時もより遅いので、お母様雀もお父様雀も心配してゐました。お土産の奴胤を、二人共大へん喜んで下さいました。でも木の洞のお家は、狭くて中に奴胤さんを入れる事が出来ません。

「仕方がないから、此處に立てゝ置きませう」お母さん雀は、おつこちないやうに、奴胤を洞の入口に立てゝ、紐を小枝に結びつけて置きました。

それからチー子ちゃんも、チユウ吉さんをだつこして下さいました。

「チユウ吉も、チー子も、よくお聞き。こんな遅くまで外で遊んでゐては、いけませんよ。あのね、向ふの森の、恐い小父さん雀が、方々の可愛いゝ子雀を、さらつて行くのですつて」

「まあ恐いわね」

「ですからお日様が、西のお山にかくれておしまひにならない中に歸るのですよ」

「ええ」

「ええ」

(三)

其の次の日です。

向ふの森の恐い小父さん雀は、あちらこちらのかはいゝ子雀をつかまへて逃げる恐い雀でした。夕方になつて、今日はチー子ちゃんもチユウ吉さんをつかまへようゝ、洞のお家に近寄

つて来ました。洞の中からは、二人のかはいゝお歌が聞こえてまゐります。

「チユウ、チユウ、父さん

チユウ 母さん

早く歸つてらつしやいな、

お米に、小蟲に、木の實や、

おみやげ、たくさん、待つてます」

「ははア、今日は二人きりで留守番らしい」

小父さん雀は、すぐそばの枝まで飛んで行つて枝傳ひに近づくミ、さうでせう。恐いゝおひげをピンミ生やして、腰に刀をさしたお侍さん。そして大きな丸いお目々で、じつミ小父さん雀を、にらみつけてゐます。田圃で見る案山子より、もつミゝ恐いお顔をしてゐます。

「おう、恐い、お侍の番兵だ。恐いゝ」

何にも知らない小父さん雀は入口に立つてゐる奴唄さんを見て、遠くへ逃げてしまひました。

かうして和夫さんの奴唄はこんな淋しい森の中に連れられて來ましたけれども、チユウ吉さんミチー子さんの仲好しになり、大事にされて、ほんきに、よかつたミ思ひました。

お時計と虹の子供

山本フミ子

お時計が未だ今の様に澤山無かつた頃のお話です。

町の時計屋さんに色々の時計が並んで居りました。そして朝から晩迄コツコツ、ボンボンミにぎやかな音をたてゝ居りました。其の中の一つが或るお家を買つていたゞいてお二階の柱に